壮年会会長あいさつ

令和3年度から中原寺仏教壮年会会長に就任しました盛田好一と申します。山奥前会長をはじめ、前役員の皆様にご尽力いただき感謝致します。

世界中が新型コロナウイルスの猛威に恐れをいだく中、我が国でも昨年より感染防止の為、お寺も法要や行事の中止や規模縮小での開催を余儀なくされています。

これまでは何の心配もなく生活出来ていたことは当たり前でなく、有り難いことであったと、今更ながら「無常」という言葉の意味を感じています。

そのような状況の中でありますが、感染防止には細心の注意を払いながら2ヶ月ごとに壮年会法座を開催ております。今年の学びのテーマである「仏説阿弥陀経」を住職の解説を基に活発な意見交換をし、その後有志による感話発表を行っております。

活動が制限される中、大いに活躍してるのがスマホやパソコンを利用した情報や意見交換等のシステムです。只今、**メールで一緒に学ぶ御同朋**を募集しております。[irizuki@cosmos.ocn.ne.jp] 入月さんまでメールでお申し込みください。

更に、中原寺ではYouTubeで前住職による『教行信証』の「総序の文」の法話を継続して発信されております。

会員の皆様、コロナ禍という特異な状況の中、充分にご自愛いただきながら、壮年会活動をより充実した活動にしたいと思っております。　（盛田 好一 記）

2020年12月13日、壮年会法座での会員発表-4「父、福島正次を語る」 *December*

12月の壮年会法座で16年前に亡くなった父の話をさせて頂きました。平成16年、その年は聞法会館の慶賛法要が行われた年でしたが、父は完成を見る事なく享年93歳で亡くなりました。その年の7月に、今生での命は終わりましたが、父の生き方を見ていると間違いなくお浄土に生まれ、仏様となって今、私の傍にいてくれる事を実感します。そう言い切れるほど日々仏法聴聞に励み、ご法義を悦びお念仏を中心とした生活でした。そのお念仏はいつでも何処にいても無意識のうちに身体の中から湧き出るようなお念仏でした。父は何故、篤い信仰のもと、お念仏申す人生を送ったのか、それは福島家のルーツにあったのかも知れません。

父は明治45年生まれでしたが、明治の男の雰囲気のある一本筋の通つた人で、私の子どもの頃は気性の荒い怖い父でもありました。その先祖は浄土真宗の盛んな越後の国（新潟県十日町）の人でしたが、父の親の代で東京に出てきて浅草の北、田中町（台東区日本堤）に移り住み、貝類や川魚を扱う商売を始めます。父はその地で生まれ育ちました。

近くの南千住に前御住職の祖父が開いていた説教所に子供のころ、親に連れられて行ったのが、中原寺とのご縁の始まりでした。

21歳で結婚し、谷中で所帯を持ち実家と同じ商売をしていましたが、体をこわし50歳を前にして仕事は長男の佳行兄に任すようになり、次第に第一線を退いていきました。

その頃から築地本願寺や中原寺にお参りに出かけるようになり、やがて築地本願寺総会所における世話人代表としての役割を努めながら、毎朝和服に着替えて休むことなくお朝事に出かけ、お聴聞に励んでおりました。

お聴聞を重ねる中で、このご法話を是非家族や従業員、商店街の方にも聞いてもらいたいとの思いから、我が家で法座を開くようになりました。昭和43年から亡くなる平成16年までの36年間、毎月親の祥月命日の23日に開いておりました。

ご講師には前住職をはじめ築地本願寺に来られた布教師の先生方や近在のお寺からも来ていただきました。

父は、浄土真宗は教えを聞く事が最も大切な努めだと常々話しておりました。壮年会、婦人会からも何人も来られましたが、今思えば大変貴重な尊い時を過ごせたことを有り難く思い出します。

また、中原寺にあっては永い間、門徒総代としての役を担っていましたが、特に本堂の建立をはじめ客殿、庫裏、山門、墓地の建設など、今の中原寺が寺としての形ができてくる創成期の事業に関わっていた時代でもありました。それだけに聞法会館の完成した姿をひとめ見たかったのではと思います。晩年は肺と心臓の病気に苦しみ、入退院を繰り返していました。

家にいるときは寝たり起きたりの生活でしたが、亡くなる10日ほど前、私が仏間の襖を開けると寝ているはずの父がお仏壇の前に座り、痩せて小さくなった背中を丸くして、小さな声でお念仏を称えていました。

今思えば、あの時見た父の姿は、得難い人生を頂き有り難うございましたという、報恩感謝の合掌の姿であったのだと、そしてあのとき聞いた称名念仏は、仏さまに総てをお任せした安心の声だったのだと思えてなりません。

父はそのあと間もなくして病院に運ばれ、数日後、阿弥陀さまのもとへ往生されました。阿弥陀さまのご本願に出遇え、「なんまんだぶ」と供に歩んだ父の生き方は、有り難い人生だったに違いありません。合掌　（福島 道宏 記）

感話 シリーズ-31

菅原伸郎先生/春季彼岸会ご法話のご縁から……

岩手地方に伝わる「念仏信仰」の浪漫

3月20日（土）春分の日 午後1時半

私が中原寺にお世話になった4年前（1997年）、お彼岸のご法話が菅原先生でした。僧籍のないご講師という珍しさもあり、ご著書『宗教の教科書･12週』を買ってみました。岩手の同郷出身者であることが分かり親近感を持ちました。

今回の春季彼岸会のご法話は、西條八十が31歳の時に次女･慧子を幼くして亡くし、悲しさ辛さを表した詩が中心でした。講題「かのように」は、悲しみのなかのユーモアを「方便」として、妻と共に偲び耐えたと、私は理解しました。「方便」を浄土真宗ではいろいろと説かれていて、未だ勉強中ですが、この度の菅原先生のご法話と、4年前に買った『宗教の教科書･12週』を通して岩手の同郷という興味の視点で書かせて頂きます。

先生は詩の鑑賞、論評を通じて宗教の味わいをされていますが、先の著書の5週目で同郷岩手の詩人で、賢治･啄木に次ぐといわれている村上昭夫の作品『ひき蛙』を取り上げています。

お母さん／もし私が醜怪なひき蛙だったなら／あなたならどうします
おお恋人ならば／たちまち目をまわしてしまう／燃えるように見つめてくれた目を
恐怖とにくしみにかえて／千里も遠くに去ってしまう
もしもまた妻ならば／子を残して家に帰ってしまう／なぜかというと／その子も私と同じひき蛙なのだから
でもお母さん／あなたならどうします
私がひき蛙だったなら／ひき蛙よりも／もっとみにくいいきものだったなら／きらわれるまむしだったなら／
つられたあんこうのぶざまだったなら／もしもあなたに／それらが私であることを告げたなら

この作品のお母さんを誰に例えているか先生は触れていませんが、私の体に流れる先祖代々の阿弥陀仏のDNAが語っているように思われます。

先生は岩手の実家で生まれただけで、育ちは北海道、東京という事でしたが、生家は現在の奥州市江刺区岩谷堂という昔から伝統家具工芸で有名なところです。江戸時代は伊達藩の最北の要所として栄え、藩内学問所に力を入れ近代には高野長英、後藤新平、斎藤実等を輩出しています。

私の興味の「隠し念仏」の善知識･山崎杢左衛門が活躍し処刑された奥州市水沢は隣町でもあることから、地元出身の菅原先生の情報に期待していた次第です。岩手に伝わる「隠し念仏」を先生のご法話と関連付けて捉えると、益々興味深く、私の浪漫も大きく広がります。

時は宝暦4年（1754年）5月25日、伊達藩士･山崎杢左衛門、他に2名の3人が隠し念仏の邪義を流布した罪で磔の刑に処されました。山崎杢左衛門の念仏信仰の影響力は大きく、信者数万人に及ぶとする歴史研究者もいます。菅原先生の生家･岩谷堂でも信者は多く、処刑の時はこの地一帯が大騒ぎになっただろうと当然の事として想像できます。今から250年位前の出来事からすると、菅原先生のご先祖との血縁は遠からずで、DNAの影響が何らかあるだろうと感じています。

隠し念仏については紙面の限りから詳細は書けませんが、岩手の阿弥陀如来信仰は中世･平泉中尊寺の阿弥陀三尊の信仰から脈々と続き、親鸞二十四輩の是信房や善鸞大徳の布教等が民衆の底流にありました。江戸時代中期に隠れキリシタン取り締まりに、本願寺（お東）が加担し東西信者獲得抗争と相まって、寺に属さない在家信仰を邪義として弾圧を受け、隠し念仏となった側面は史実からも読み取れます。隠し念仏は親鸞聖人、蓮如上人の教義であることは違いなく、邪義とは信仰解釈の相違で、信心獲得の「方便」の違いであるような気がしています。　（入月 正 記）